



## 似て非なる「アダム・スミスの娘たち」

——マルティノー著『経済学実例集』にみるマーセットの影響——

吉 野 成 美

**概要** 本稿では経済学普及者としてのジェイン・マーセット (1769-1858) が、彼女の後続者としてしばしば見なされるハリエット・マルティノー (1802-1876) に与えた影響を、両作家のそれぞれの代表作を比較しながら考察している。マーセットに関してはマルティノー自身が影響を受けたことを認めている『経済学対話』と『ジョン・ホブキンス』を、また、マルティノーに関しては全9巻25話に及ぶ『経済学実例集』の全体の構成と、その中の特に一話を取り出して、物語内容と特に対話形式を採用している部分についてマーセットの作品との相違点と類似点をそれぞれ指摘し、それぞれの作品内における経済学の位置づけと執筆者としてとった立場の違いを明らかにしている。

**キーワード** ジェイン・マーセット, ハリエット・マルティノー, 経済学大衆化

**原稿受理日** 2009年1月15日

**Abstract** It is often said that Jane Marcet, well known as the first woman economics popularizer in England, had great influence on her follower, Harriet Martineau's main work, *Illustrations of Political Economy*. This paper examines differences and similarities found in the form and contents of the two writers' works, and points out how the writers treated "political economy" in their own particular ways, thereby placing their works in different genres.

**Key words** Jane Marcet, Harriet Martineau, popularization of economics

本研究は科研費（「19世紀英国におけるジェイン・マーセットの経済学大衆化への貢献とその意義」, 研究代表者 高木成美, 課題番号 20730141）の助成を受けたものである。

経済学史において経済学普及者としてのジェイン・マーセット（1769-1858）が果たした役割を考えると、彼女の教本を読んで実際に経済学を学んだ読者への「直接的」影響はもちろん大きい、彼女の教本からその手法を見習い、さらなる教本を執筆するにいたったその他の経済学普及者への、いわば「間接的」影響もまた、見逃すことのできない重要な問題であろうと思われる。多岐にわたる学問分野においてそれぞれ教本を執筆したマーセットが、こと経済学の分野においてその「普及」という観点からもっとも影響を与えた人物として、今日誰もが認める人物は、彼女より33歳年下の女性文筆家ハリエット・マルティノー（1802-1876）であった。本論では、19世紀英国におけるマーセットの経済学大衆化への貢献を、同じく経済学大衆化に貢献した後続の文筆家、マルティノーの作品にその影響をみながら考察することを目的としている。

マーセットとマルティノー、この二人の名前はこれまで経済学史の周縁部で言及されることがあれば、多くの場合、あたかも二人一組であるかのように扱われてきたといっても過言ではない。二人は年齢の差こそあれ、その執筆活動期が19世紀前半に重なっているほか、経済学という同ジャンルで小説仕立ての教本を出版しており、何よりも、当時としてはまだ珍しい「女性」文筆家であった。例えば、ヘンダーソンは、19世紀の英国において、マルティノーがどのように受け入れられていたのか、次のように書いている。

『エディンバラ誌』がマーセットに好ましい評価を与えていたとするならば、『クォーターリー誌』はエッジワースをお気に入りしていた。そして両誌はマルティノーの著書をマーセットかエッジワース、どちらかと比較する必要があると思っていたのだ。どちらも、経済学者として認められていた男性の著作と直接的に比較しようとはしなかった<sup>(1)</sup>。

女性であるという理由でその結びつきが殊更に強調されていたのは二人が活躍した当時だけに限らない。二人を「アダム・スミスの娘」にたとえてスミスの古典派経済学の普及に尽力したことを指摘したトムソンとポーキングホーンを初めとして<sup>(2)</sup>、「ジェイン・マーセットとハリエット・マルティノー——経済学教育におけるパイオニアたち」というタイトルの論文を書いたシャクルトン<sup>(3)</sup>は、それぞれの経済学大衆化への貢献を、その類似点と相違点を分析することもなく、時系列的にまとめている。

(1) Henderson, 81.

(2) Polkinghorn and Thomson, 1-29.

言うまでもないことであるが、同時代に同じジャンルで本を出版した同性の二人を、ただそれだけの理由で同類もしくは類似の作家と安易にひとくくりすることはできない。知的で裕福な家庭環境に育ち、結婚後、そのあまりある知性を生かすべく、夫に後押しされて教本類の執筆に携わったマーセットに対し、知的な環境で育ったとはいえ、聴覚障害をおいながら、父親の死後、その文才で経済的に自立することを余儀なくされたマルティノーは、前者に比べてはるかに野心的であり、自身が著した本の商業的成功をたえず念頭においた文筆活動を展開せざるをえない状況にあった。そして、二人の生い立ちやとりまく周囲の環境、そしてそこから生じる思想の相違といった伝記的史実をふまえて両者を比較したのは、英国におけるマルサス論の普及について論じているハゼルである。彼はマルサス擁護者としてマルティノーをその代表格として挙げた上で、彼女とマーセットはそれぞれの著書の中で同じような主張をしているにもかかわらず、世論が常にマルティノーに対して冷たかったのに対してマーセット自身は批判を免れた理由を、双方の既婚・未婚の違いや社会的地位と思想といった、いわば外面的な要素に起因した論を展開した。

ハゼルによるマーセットとマルティノーの両者比較論にはそれ自体に説得力はあるものの、果たしてこの二人がそれぞれ著した教本そのものにはそれほどの相違点は見当たらないといいきれののだろうか。化学の教本、『化学対話』を匿名で出版するところからその文筆活動をスタートし、世論の支持を得ながらもたえず控えめだったマーセットに対し、原稿を片手に出版社を探し回り、最後は、イギリス議会の議員全員にコピーを配布してその宣伝に奔走したマルティノー。後者は前者のベスト・セラー教本である『経済学対話』を常に意識し、またその影響をうけながらも(もしくは、意識し、影響をうけたが故に)といったほうが正しいかもしれない)、自身のオリジナリティを作中に盛り込む必然性があった。当然、そのスタンスは実際に作品内にも様々な仕掛けとして反映されているはずで、その点に関してこれまでの研究者たちの分析はなされていないのが現状である<sup>③</sup>。以上の点を踏まえた上で両者の作品の形式や内容の具体的な比較検討を以下に行う。

③ ここで断っておかなくてはいけないのは、マーセットとマルティノーの作風の違いは、両者の作品を読んだ人なら誰でも気づくほど歴然としているという事実である。ただし、これまで二人の著作に言及してきた研究者たち(特に経済思想史の分野において)が着目してきたのは、あくまでも両作品が扱う「経済学」という学問の内容であり、そこに反映されている両作家の経済学上の思想の類似や相違点であった。そのような理由から、作風の違いといった、どちらかという<sup>④</sup>と作品の枠組に関わる議論はこれまでまったくといってよいほどなされておらず、本論ではその点を特に分析の対象としている。

## I. 構成の相違

女性文筆家としての評判を一躍有名にしたマルティノーの『経済学実例集』(*Illustrations on Political Economy*)は1832年から2年にわたって全25話のシリーズ読物として出版された。これは、各一話が中篇程度の長さの読みきりの物語仕立てになっており、社会の諸問題が写実主義的な小説スタイルで描写される一方、その問題解決の糸口をさぐるにあたって経済学の知識が披露され、各物語の最後には通常の小説には見られない要約文がついて、物語で示された人間模様のドラマから導き出せる経済学的考察を結論として提示するという形をとっている。そして、このデビュー作執筆の直接の動機付けとなったのが、マルティノー自身がずっと後になって発表した『自伝』に言及されている、マーセットの『経済学対話』であった。

1827年の秋のことだったと思うが、近所の人が私の姉にマーセット夫人の『経済学対話』を貸してくれた。私はその本を取り上げて、経済学というのは正確には何なのかを知ろうとした。そして大変驚いたのだが、私はそれを機械と賃金についての物語の中で、既に気がつかないうちに教えていたのだった。そしてすぐに、この学問の原理全体が同じ方法でうまく説明できると思いついたのだ。物語に包み込まなくとも、社会生活を厳選された言葉で綴った中でありのままの[経済]機能を描写することによって。——(中略)——彼女[マーセット]の本を読んでいるうちに、それはアダム・スミスやそれ以外の経済学者たちの本を読んでいるときにもそうだったように、人々の集団がページから浮き上がり、議論の中から次々に人々の日常的な行動がすべりだしてきたのだった。家で作業をしていたある日の昼下がり、私はこの考えを口に出して言ったことを今でも覚えている。弟のジェイムズは賛成して頷いてくれた。母は「やりなさいよ」と言ってくれた……<sup>(4)</sup>。

自伝におけるこの一節から明らかなのは、マルティノーはマーセットの『経済学対話』から知識としての経済学を習得した後、その行間に「人々の集団」や実際の「行動」を連想し、それらをより写実的な人間ドラマとして自身の作品に仕立てたことである。マーセットが経済学の原理そのものを、教育を受ける機会に恵まれなかった人々を対象に、よりわ

(4) *Harriet Martineau's Autobiography*, 105-6.

かりやすくかみくだいて説明しようとしたのに比べ、マルティノーは経済学が人々の実際の生活の中でどのように影響を及ぼしているのか、写実的な人間ドラマで示唆することにより、経済学とは日常生活を営むすべての人間に関わっていることを読者たちに知らしめることに焦点をあてているといえる。

著作活動を行う上での二人のスタンスの違いは、当然、それぞれの作品の構成やスタイルに反映されている。例えばマーセットの『経済学対話』では、架空の女性教師B夫人とその教え子キャロラインの対話形式を採択していて、そのやり方は一見、斬新そうな試みに見えなくもないが、実際に二人の対話の内容を読み進めてみれば、章ごとに予め定められたテーマとトピックによって経済学の原理を師弟の間で語らせることによって説明していくという、きわめてオーソドックスなスタイルに落ち着いている。女性登場人物による対話形式という「演出」は、経済学の内容を若い女性読者に浸透させるためにそれなりの効果を発揮しているものの<sup>(5)</sup>、例えばキャロラインが作中において、経済学の勉強で知識を得ること以外に経済に関わる劇的な実体験をするようなことはありえない。つまり、マーセットの教本では登場人物たちは経済学を勉強することにのみその存在意義を見出される位置づけにとどまっているにすぎない。対するマルティノーの『経済学実例集』では、登場人物たちは必ずしも経済学を作中で習得するわけではない。それどころか、そのおかれた立場によっては、「経済学」という学問について何も知らず、無意識のうちに、ただその原理によって説明が可能な様々な社会現象の恩恵を受ける者がいる一方で、社会現象の犠牲者になる者もいたりする。そしてそれを物語の外側から眺める立場にいる読者だけが、社会の仕組みの全容を知ることによって、経済学も習得できるような設定になっているのである。クーパーの言葉を借りるならば、「現実的な虚構と演繹的な経済学双方の要求に合致するような社会的関係の煩雑さを減らすために、マルティノーは、よいものであれ悪いものであれ[経済学の]原理をある種の決まった型やキャラクターに体现させていて、この小説内の人物たちこそが実生活に由来するあらすじにおいてこれらの原理を遂行する役割を果たしている」といえるだろう<sup>(6)</sup>。

『経済学対話』との相違点を指摘する上でもう一つ重要であるのは、マルティノーの本の全体的な構成と分量である。『経済学実例集』は前述でもふれたようにテーマごとに一回一回読みきる形の小説本として2年間にわたり継続発行された。各小説は単体でも独立した内容として楽しめる一方、全25巻がそろった状態でもまた、全体としてまとまりのある経

(5) Yoshino (2007), 126-130.

(6) Cooper, 114.

経済学教本大全となりうる統合性を意識して創作されたものであった。このことは、例えば、シリーズの最終である第25話が全体のまとめとしての役割を担っているところに、具体的にみることができる。2年間のシリーズものとなった背景には、もともとマルティノー自身の構想の中で四半期ごとの定期発行シリーズが念頭にあったことと、また、マルティノーが出版を依頼したフォックス社が彼女の本の売れ行きに対して出版前にはかなり悲観的であり、シリーズの途中であっても売れなかつたらすぐに契約を打ち切るという過酷な要求をつきつけたことがあった。もっとも、この厳しい条件は、第一話『野生の生活』の発表後すぐにその評判が予想外に良かったことですぐに撤回され、『経済学実例集』は版を重ねて、最終的には一話ごとの読みきり単行本だけでなく、数話まとめて1巻とし、9巻本としても発売されることにつながっていった<sup>(7)</sup>。当初はその成功が危ぶまれた『経済学実例集』は、結果的には月ごとに発行される読み物としてシリーズ化されることで、定着した読者を手放さず、かつ新たな読者を取りこむという商業的成功にも寄与したことになる。

想定した読者層にもまた、マーセットの著書と比べて若干の相違点がみられる。『経済学対話』は、高等教育機関において経済学を学ぶ機会が与えられなかった10代の女性たちを対象に、自宅で経済学を学べるように意図して書かれた教本であった。それに対して『経済学実例集』のほうは、読者層は必ずしも経済学を学ぶことを希望する者に限らず、読み物を楽しむ人ならば誰でも取り込み、読みの行為の過程において結果として経済学を習得できるように意図されていたと考えてよいだろう。そのことは、例えば出版時の判サ



マーセット著『経済学対話』アメリカ版初版(左)と  
マルティノー著『経済学実例集』第三版(右)の現物

(7) マルティノーが『経済学実例集』を出版するまでのエピソードに関しては、マルティノー自身の *Autobiography* とともに、Thomas (9-13)、Wheatley (78-84) の伝記的研究を参照している。

イズがペーパーバック版で一回り小さく(14.5cm×9.5cm)、持ち運びに便利であり、したがって外出先でさえも読めるような手軽さであったという事実からもうかがえる(写真資料参照)。加えて、後に9巻本にまとめられた際には革張りの装丁になっており、これは「中流階級向けに意図されていた」ことを意味していた<sup>(8)</sup>。マーセットの『経済学対話』が、書齋において書棚から取り出して「勉強」する参考書に限りなく近いものであるとするならば、マルティノーの『経済学実例集』は、居間でくつろぎながら読むことができる、娯楽的写実小説風の教本であった。

もちろん、『経済学実例集』を書くにあたって、マルティノーはマーセットと同様、当時の主要経済学者で彼女自身が傾倒していた論を下敷きにしていて、例えば、ブローグによれば、彼女は、マルサス、ジェイムズ・ミル、スミス、そしてマカロークらの代表作を読み、それらを拠り所としていた。リカードゥに関してはジェイムズ・ミルにならってその論を自身の『経済学実例集』で活用しているという<sup>(9)</sup>。また、ポーキングホーンとトムソンによれば、彼女は「アダム・スミスの利害の調和に関する教義をそのまま支持した。彼女はまた人口過剰がすべての社会悪の原因であると強調した。リカードゥの比較優位に基づく自由貿易論や賃金基金説はいくつかの事例において利用されている。セーの市場法則論も取り入れられて」いた<sup>(10)</sup>。ただ、マーセットが『経済学対話』の冒頭でまず、こういった古典派経済学者たちの名前を实名で挙げ、献辞を述べた後、本文中においてもしばしば、B夫人とキャロラインの対話において直接的に彼らの書物から必要箇所を冗長なまでに引用して紹介するという、ある意味、普段行う日常対話にしてはかなり不自然なやり方でもって経済学の学術的な説明に力点を置いているのに対し、マルティノーはあくまでも「小説」というジャンルと枠組にこだわっていたが故にであろうか、教本とはいえ、そういう強引な学術的引用をする方法はとらなかった。そしてそのような意味では、マーセットの経済学を扱った二作目である『ジョン・ホブキンズの経済学の概念』(1833)<sup>(11)</sup>のほうがどちらかといえば、マルティノーの『経済学実例集』とそのスタイルの面で類似しているといえるかもしれない。

上記で言及した二人の作家による作品の相互関連性を示唆する手がかりとして、マーセットの『経済学対話』と『ジョン・ホブキンズ』それぞれの章タイトル、そしてマルティノーの『経済学実例集』の巻それぞれの表題と内容要約一覧表として提示しているの

(8) Hoecker-Drysdale, 37.

(9) Blaug, 131.

(10) Polkinghorn and Thomson, 23.

(11) 以後、この著書に言及する際には『ジョン・ホブキンズ』と略して記載する。

## 『経済学対話』(1816)

章	目次
1	序
2	続 序
3	資産について
4	続 資産
5	分業について
6	資本について
7	続 資本
8	賃金と人口について
9	続 賃金と人口
10	貧民の状況について
11	収入について
12	地代による収入について
13	収穫による収入
14	資本貸出による収入
15	価値と価格について
16	貨幣について
17	続 貨幣について
18	商業
19	外国貿易
20	続 外国貿易
21	支出について

## 『ジョン・ホブキンス』(1833)

章	目次
1	富める者と貧しき者—おとぎ話
2	賃金—おとぎ話
3	三人の巨人たち
4	人口に関して—旧世界
5	移住—新世界
6	貧民税—不誠実な友人
7	機械—安価な商品と高価な商品
8	外国貿易—結婚衣装
9	穀物貿易—パンの価格

が次の各表である<sup>12)</sup>。

表にしてマーセットの二作品とともに並べてみれば、後者はまずその表題のみを取り上げてみても、『経済学対話』に比べて「教本」という印象が薄らぐように配慮されていることがわかる。もっとも、労働者階級を想定読者として書かれた『ジョン・ホブキンス』の章の表題は「物語」を連想させるものが含まれているとはいえ、少なくとも表題から経済学の内容を連想しうる程度の経済用語は散見される。それにひきかえ、マルティノーの著作では、全集としては『経済学実例集』と銘打っていたとしても、個々に独立した巻を手にとった際にはそのタイトルおよび章タイトルは限りなく小説に近く、実際、中身は小説となら変わらず、架空の登場人物による人間ドラマが繰り返し広げられるだけである。仮に何も知らない読者がこのシリーズの一冊を手にとったとして、読んだ物語が実は経済学の教本として書かれたものであることを認識するのは、巻末の「要約」において初めて明

12) 『経済学実例集』の表に記した要約の欄は筆者が本文内容や巻末の要約文を参照した上でまとめたものであるが、多くの場合、各話で扱われるテーマは決して一つではなく、様々な諸問題が複合的に絡んでいることをここに断っておく必要がある。例えばマンチェスター・ストライキは、その表題からも大方推察できるように、労働者と賃金、組合について扱った巻であるものの、実際には晩婚奨励といったマルサスの人口論に影響をうけたと思わせる箇所もある。

『経済学実例集』(1832-34)

巻	話	表題	扱われる内容(筆者要約)
1	1	野生の生活	分業の効率性と能力主義
	2	丘と谷	資本と労働,
	3	ブルック村とブルック農場	理想的な集団労働形態
2	4	デメララ	奴隷制
	5	ガーヴロックのエラ	地代について
	6	ガーヴロックの喜びと悲しみ	人口について
3	7	マンチェスター・ストライキ	労働組合とストライキ
	8	従姉マーシャル	救貧法について
	9	アイルランド	アイルランドの現状
4	10	外国の我が家	植民地移住について
	11	一人のために、皆のために	賃金と利益と物の価格について
	12	フランス産ワインと政治学	使用価値と交換価値
5	13	魅惑の海	物の交換
	14	銀行家パークレー I	紙幣について
	15	銀行家パークレー II	紙幣について
6	16	ヴァンダーブット氏とスヌーク氏	外国貿易について
	17	織機と帆船 I	自由貿易と自由競争について
	18	織機と帆船 II	
7	19	刈る人ではなく、種をまく人	穀物の収穫と需要、供給について
	20	シナモンと真珠	植民地の貿易
	21	タイン川の物語	国家の介入について
8	22	ブライアリー・クリーク	生産と消費・需要と供給
	23	3つの時代	公共支出に関して
9	24	バッジロウのファラー家	税に関して
	25	多くの寓話で語られた道徳	経済学原理のまとめ

かされる物語内事象の経済的側面を経済用語を交えて説明しなおされるときだろう<sup>③</sup>。しかもその要約は、小説内で扱った事例にのみあてはまる経済学諸説の一つに過ぎず、ある程度まとまった体系的な説明は最終巻まで待たなくてはならない。この点は特に、構成の面で、一冊で経済学の諸説をある程度網羅する意図で書かれたマーセットの教本類とはまったく異なっている。

## II. 内容の相違

前述したように、マルティノーはマーセットの『経済学対話』に影響を受け、自身の著書『経済学実例集』を書いたことを『自伝』の中で認めている。それではマーセットの『ホプキンズ』に関してはどうなのだろうか。年表上では、マルティノーは『ジョン・ホ

③ ただし、25話を9巻本にまとめた版では各巻の冒頭部でその巻全体で示している事例と経済学との関連について序文がついている。

『ホブキンズ』の出版より一年早く自身の『経済学実例集』を出版し始めたため、マーセットの影響を受けたとすれば『経済学対話』のみということになる。だが、ここで見逃してはいけないのが『ジョン・ホブキンズ』の下敷きとして書かれたマーセットの5編の小話(Essays)が1831年頃にパンフレット形式で出版されていたことである<sup>14)</sup>。つまり、1832年から34年にかけてマルティノーが『経済学実例集』を連載している過程において、マーセットの小話に何らかの影響を受けた可能性は否定できないということになる。そして実際、マルティノーの物語では、マーセットの『経済学対話』におけるB夫人とキャロラインのような中上流階級の人物たちと、『ジョン・ホブキンズ』における農夫ジョンのような貧困層の両方が作品内に登場し、互いに関連性をもった社会の構成要素として複合的に描かれているため、ある意味、『経済学対話』と『ジョン・ホブキンズ』各々に登場する人物たちの視点を併せ持った、より重層的で現実味を帯びた読み物として通用する内容になっている。マルティノーは物語の創作過程においてリアリズムを追求する上で、マーセットの両作品のそれぞれの設定を自作品に取り込んだと類推することができる。

ここで具体的な内容を検証していくにあたり、『経済学実例集』の第8話で1832年に発表された『従姉マーシャル』(*Cousin Marshall*)をとりあげてみたい。扱っている内容は救貧法の不当性をうったえるもので、このテーマはマーセットの『経済学対話』、『ジョン・ホブキンズ』でそれぞれ1章分を充てて論じられたものでもあった。とりわけ、『ジョン・ホブキンズ』の第6章(1831年のパンフレットでは第4話に該当)では、主人公の貧農ジョン・ホブキンズ自身、教区の救済金の享受者であり、そのことをめぐって隣人でホブキンズよりはまだ羽振りの良い農業従事者スタッフスから、救済金とは貧困の根本的解決にならないだけでなく、むしろジョンの貧困の原因であり、「不誠実な友人」なのだという事実を聞かされ、ジョンは開眼していくという話の流れになっている。

救貧税がはらむ問題をテーマにした『ジョン・ホブキンズ』と『従姉マーシャル』であるが、両者の最も顕著な相違点を挙げるとするならば、それは、前者では救済制度を受ける貧民の典型が主人公のジョン一人なのに対し、後者では、物語に登場する貧民を、救済制度を真に必要とする者と、制度を悪用して安易に私腹を肥やすばかりで働こうとしない者の二通りに分けていて、救貧法は前者のために必要であっても、後者のタイプを生み出すことにつながりかねない点を特に強調する立場をとっている点である。

『従姉マーシャル』は、マーシャル一家をとりまく様々な立場の人々が繰り広げる物語で

14) これらの小話(essays)は、それぞれ第1編が『ジョン・ホブキンズ』の第1章、2編目が第2章、3編目が第4章に、4編目が第6章、5編目が第8章の下敷きとなっている。

あるが、話はマーシャル家の親戚にあたるブリッジマン家が火事で焼け出されたところに始まる。ブリッジマン家は父親が不在で、母親は火事の後、病死してしまい、残された孤児たち四人は、母親の姉、ベル夫人に拒絶され、さらに遠い親戚のマーシャル家に助けを求めていく。だが、ブリッジマン家同様、生活の苦しいマーシャル家でも4人全員を引き取ることはかなわず、年長の二人、ネッドとジェインをしぶしぶ救貧院に入れて、年少の二人、すなわち、失明寸前のサリーと最年少のアンのみ、自宅で面倒をみるのだが、その後サリーは完全に失明し、盲学校の施設に移ることになる。このように、ブリッジマン家の孤児の離散によって、物語では、①孤児たちを助けようとする善良なマーシャル家の生き方とその実状、②ネッドとジェインが入った救貧院（およびサリーの盲学校）の実状、③ブリッジマン家の孤児たちを気にかけるパーク医師（彼は貧困層のための慈善病院で診察をしている）とその妹による国の慈善事業に対する問題提起という、大きく分けて3つの異なった社会的立場にある者の視点とテーマからそれぞれ多角的に語られることになる。このうち、①の勤勉で正直な善良市民の典型であるマーシャル家に関しては、この種の貧困層と対比させる意味で、怠慢で救済金を悪用する故ブリッジマン夫人の姉ベル夫人が登場し、数年前に死亡した乳児の名前を使用して毛布や衣服といった生活物資の不正受給を行ったり、彼女とは別人であるが同類の貧者が救済金や物資の給付に際して役人の前で演技をして少しでも給付金の額を増やそうと企む手口が生々しい描写で紹介されている。同様に、ブリッジマン家の孤児たちの中でも、救貧院の環境に甘んずることなく、あくまでも自身の労働力で自立することを切望するネッドに対し、自墮落的に身を持ち崩し、最後は未婚の母となってしまうジェインというように、救貧院に預けられた子供たちでさえ、その行く末は一つではないことを示唆する細やかな工夫が見られる。また救貧院については、その道德規律に欠ける施設内での状況を、パーク医師の妹が視察する立場から、またジェインがその慈善の享受者という立場から、それぞれの視点で読者に情報を提供し、本来貧困層を救済するために作られた制度であるはずの救貧院が、労働意欲の乏しい怠慢な貧困層の再生産の場と化していることもまた物語内で明らかになっていく。『ホプキンズ』において貧困層を体現していたのは多産で無知なホプキンズ一家のみという、わかりやすい一方でステレオタイプのという印象が否めなかったマーセットの演出に対し<sup>15)</sup>、マルティノーは前者が一つにまとめていたいわゆる他者としての「貧困層」をさら

15) もっとも、『ジョン・ホプキンズ』でも、主人公のジョンは善良な貧農であって、彼自身、教区の救済金を受け取りに行くことを恥ずかしく感じていることは作中で何度も強調されている。しかしそれでも、隣人のスタップスはジョンの貧困の原因を無計画な多産であると指摘し、ホプ

に掘り下げ、様々なケースを描いたのである。そしてこの、貧困層を多層化してとらえる背景には、マルティノーの救貧法に対する明確な意見がある。すなわち、貧困層には、制度を悪用することを覚えて労働のインセンティブを完全に失っているタイプと、勤勉だが様々な不運が重なって一時的に貧者となっているタイプが存在し、救貧法は後者のために必要であっても、前者のタイプをさらに増やしかねない点が問題なのであるということを特に強調する立場をとっているのである。

写実的な物語——もしくは(中編)小説といっても差し支えないほどの内容である——として申し分ないだけの多角的情報をつめこんだ『従姉マーシャル』ではあるが、作者が意図した経済学的な考察を読者にいざ促すにあたって、マルティノーはマーセットが『経済学対話』および『ジョン・ホブキンズ』でも固執した対話形式を同じように用いている点は重要である。物語の場面設定はマーシャル家から救貧院や教区の救済金給付所へ、またパーク家の居間へ、救貧税を支払っている農家の家々と、焦点となる登場人物にあわせてその都度かわっていくわけであるが、政府の報告書(blue books)や実際の取材を経て描写したという救貧院や配給所での新聞報道的な語り比べて、例えばパーク家の居間において兄と妹が繰り返す会話の場面(3章)とパーク氏と友人の会話の場面(8章)では、場面転換の説明に必要な語り手による地の語りは最初の数行で、章全体がほぼ二人の登場人物による、「慈善事業」の制度に対する問題点の摘発と潜在的な打開策を語る対話文がそのまま収録された形となっている。

少し長くなるが第3章の一部をここに例示してみよう。貧者を救うために設けられた慈善医療の現場で目の当たりにする様々な理不尽なケースに疲れきって帰宅したパーク医師は、妹の淹れてくれたお茶を飲みながら、仕事の愚痴を語り始める。話の舞台として設定されている「暖炉のもえる居間」という家庭的空間は、いかにもヴィクトリア朝時代の感傷小説にありがちな演出であるが、もちろんこの設定は単なる導入に過ぎない。低所得者のための慈善診療所を訪れる患者数が増加し、財源が不足している現状を語るパーク氏

---

ㄨ キンズ夫妻はそれに対して何もいえない。また、ジョンとスタップスが繰り返す対話中に挿入される別の地方の事例に関する情報では、救貧税の定める税率設定により、既婚が未婚より、また子供の数が少ないより多いほうが有利になることから、人々はただ給付金を目当てに早婚多産となり、税を徴収される側の不満も増大する弊害が示される。この事例は、マルティノーが『従姉マーシャル』で指摘する問題点とほぼ似通った性質の問題を扱っていることになるが、登場人物同士の対話中の挿入話としての扱いであること、また、この種の問題とホブキンズ家が出ている救済金の間に際立った性質の相違点が強調されることはないため、『ジョン・ホブキンズ』では貧困層への救済金は一律で国家にとって不利益であるという強硬な結論に終結してしまっている。

は、患者たちの道徳観についても問題視して次のように妹に語る<sup>06</sup>。

パーク氏

一生涯、薬や診療行為を供給されて当然と考えている貧困層の人間がいるというのはそれだけで十分な弊害だよ。出産のための助成が当然だと思うことで、この弊害は日増しにひどくなっている。これでもし彼らが食べ物や衣類までこんな調子で期待することを覚えてしまったら最後だよ。

ルイーザ

でも、私たちに何ができるというの？ 貧困は存在しているし、貧困層の人たちには自分たちで何とかするための特効薬がないわ。

パーク氏

そこが難しいところなんだ、ルイーザ。間違っただ制度の根本にある問題だ。それでもやらなくてはいけない。現在あるあまりにも多くの悲劇の問題に対してできる限りのことをしなくては。それを引き起こした過ちを我々がついに把握できたことに感謝して。ひどい状況をこれ以上増やさないようにしなくてはいけない。(中略)問題は、どうやって貧者の数を減らすか、ということだ。これはもちろん、どうやったら低所得者が貧者にならないか？という問題も含んでいる<sup>07</sup>。

(中略)

ルイーザ

それで、お兄さん、どうやったらそうなるというの？ 貧者の数を減らすのにどうやってとりかかるの？

パーク氏

私は二つの目標に狙いを定める。一つは労働者のための資金を増やすこと。それから、この資金は働いている人間の数に比例させること。まず最初の目的達成のために、資本を増やすために用いられる通常的手段はもちろん使わなければならないだろうけれど、それだけではなく、現在、貧困層によって非生産的に消費されてしまっ

06) 以下、テキストからの引用に際して、話し手が誰であるかを明確にするためにセリフの前に話者の名前を付しているが、実際のテキスト(『経済学対話』を除く)においてはこれらのセリフはすべて直接話法でカッコ内に引用という形をとっている。

07) 貧者という訳語をあてはめたのは原文では the indigent と呼ばれる人々のことである。マルティノーは the poor と the indigent を区別して使用しており、the poor は貧しいが労働意欲を失っていない人々であり、それに対して the indigent は労働意欲を失ってしまった貧困層をさす。両者の違いを訳出するにあたり、the poor は「低所得者」としている。

いる莫大な資金を生産的な目的のために使うようにしなくてはいけない。これは急にはできないだろう。だが、これは大胆かつ着実に、そして徐々にその割合を増やして行わなくてはいけない。こうすれば結果としてもう一つの目的達成にもつながっていくだろう。つまり、その資金に頼る消費者の数をへらすということ。

ルイーザ

それじゃあすべての慈善制度を徐々に廃止していくということになるじゃないの。そんなのいけませんわ！全部なくすのは。慈善制度の中には資本を減らすことも人口を増やすことにも寄与していないものがあるではないですか。そういったものは残しておかないと。

パーク氏

残しておこうと思うものもあるさ。人々を啓蒙することができるものはね。学校は人の数や能力にあわせて、とにかく増やして改善するべきだろうね。

ルイーザ

なんですって！すべての学校ですか？学校では教育だけでなく、扶助<sup>⑧</sup>も与えられているというのに？

パーク氏

扶助の部分に関しては排除して、指導する部分に関しては残したら良いんだ。

ルイーザ

でもお兄さん、貧者が間違っただけの援助に頼るとするのが無償の援助の悪い面だとすれば、これは無償の教育にも当てはまりませんか？

パーク氏

貧困層が完全に自活し、家族も支えられるようになるときは必ず来ると、私は信じているよ、ルイーザ。でも現時点では私たちは彼らが生存に不可欠なものを得られるようにしてやるしかできない。彼らがそうできるようになるためには、教育が必要なんだ。そして教育は生存に不可欠なものではないけれど、それがなくてはならないと彼らがわかるまで、無償で提供しなくてはならない……。(241-2)

---

⑧ 原文は where maintenance is given as well as education? となっている。ここで言う maintenance には、「維持費」と「扶助費」、どちらの定義がふさわしいのであろうか。maintenance が education と同格で教育を受ける者に「与えられるもの」と解釈するならば、「維持費」ではなく「扶助費」となるだろう。19世紀英国の多くの学校が基金によって運営されていたことから考えて、教育がその対価を支払って得るだけでなく、「(扶助として)無償で得られるものでもある」とここでは解釈している。

パーク氏の貧困層援助の現行制度への批判とそれに対する代案として提言している「教育への投資」はそのまま著者マルティノーがこの小説でもっとも伝えたいメッセージである。そして、この上記の引用部分の原型とでも呼べるものを、我々はマーセットの『経済学対話』の次の部分に見ることができる。

#### B夫人

救貧税は慈善金という形で、怠惰な人間や浪費家にあまりにも頻りに施されています。本当なら、積極的な労働の報酬となるべきであるにもかかわらず。もし貧困税の徴収額が国の循環資金に加わったとするならば、[救済金の世話にならずに]独立して生計を立てている労働者は自身や家族のために今よりも多くの日当をかせぐことができるかもしれません。そして教区の救済金のための財源を侵食することなく、病気や年老いたときのためにいくらか蓄えておくこともできるかもしれません。フランスでは、救貧税を確立しようと一度提案されたことがあったのですが、貧民対策委員会ではそれを拒否したのですよ……。

(中略)

#### キャロライン

でも、どうしたら良いというのでしょうか。貧者だからといって飢え死にするわけにいかないでしょう。たとえ彼らが怠惰で性質が悪かったとしても。

#### B夫人

もちろんですとも。それに金遣いが荒い男の妻子は大抵の場合、この男性の不始末の被害者ですからね。それから思いがけない苦境が訪れて、いくら普段から分別ある生活をしていてもそれを予測したり予防したりすることが無理な場合もあるでしょう。こういった場合にはもっともひどい苦境を生じさせないようにするために貧困税は廃止されるべきではないのです。そういうわけで私としてはこの弊害に対処するためには、ゆっくりではあるけれども徐々に効果が期待できる教育しかないと思うのです。下層階級の考え方を啓蒙することによって、彼らの道徳的習慣は向上し、そして彼らは威厳と独立の感情が失われている墮落の状態から這い上がることもできるのです。

(164-5)

抜粋した引用文はマーセットのものに比べてマルティノーのほうがその分量は随分と多くなっているが、どちらもその構造に共通点が見られる。すなわち、

- ① 知識のある者が主張を述べ、(バーク氏, B夫人)
- ② 知識を習得する能力がある者が聞き手となって時には相づちをうちながら, 時には凡庸な反論で呼び水を差し(ルイーザ「でも, 私たちに何ができるというの?」キャロライン「でも, どうしたら良いというのでしょうか?」)
- ③ さらに詳細を引き出す

という, 対話形式内での主従の役割分担による論の運び方である。

なお, 貧困層への対策として, 物資の支援を是とせず, 多少の時間を要するためにその効果が不可視的ではあるかもしれないが, 貧困層の教育の重要性を訴えている点に関して, マルティノーはマーセットに影響を受け, その主張を踏襲しているという点が良いだろう。このことに関しては, 例えばトーマスは次のように述べている。

マルティノーの作品で繰り返し見られるのは, 行政よりはむしろ教育こそが働く人々の生活を最終的には向上させるより効果的な手段であるというテーマに戻っていつていることである。そしてこの, 社会の進歩が教育の成果によってもたらされた変化の結果であるという確信が, マルティノーの物語の使命感の基礎になっているのである。間違いなく, マルティノーは自分の書いた物語が経済学の原理を読者たちに浸透させられるのであり, そのことこそ, 重要な社会改革を成し遂げる最も効果的な手段であると信じていた<sup>9)</sup>。

さて、『従姉マーシャル』の第3章において顕著であった対話形式は後に第8章「慈善とは何か」で再び, 今度はバーク氏と知り合いの地主エフィンガム氏との間で用いられることになる。ここでは近隣の農夫デイルが破産したことを受け, バーク氏とエフィンガム氏が現行の救貧法制度が税を徴収される中間層にとっていかに不公平なものであるかを議論している。

#### バーク氏

君の足取りと顔つきから判断して, 今日の君は僕が診察しなくてはならない患者の一人みたいだが? どうしたんだね? 家で何か不幸でもあったのではないだろうね?

---

<sup>9)</sup> Thomas, 92.

エフィンガム氏

いや、ちょっとそこでとても驚くことを聞いたもので。デイルが破産したんだ。

パーク氏

かわいそうに。彼は随分、つらい思いをしていたのだろう。そしてついには破産したってわけか？

エフィンガム氏

そうだったとしても、私の知る限りこれは決して彼のせいではない。救貧税のために差し押さえられたのさ。

パーク氏

ははあ、これだよ、エフィンガム。こうやって年々、貧民の数が増えていくんだ。どちら側からも増えていく。貧民自体がものすごい勢いで増えていく一方で、救貧税を支払っている方も救済金を受け取る側にまわっていってしまうんだ。デイルもおそらくそうなるさ。他の多くの小農家や店主や工場主、商人、農業経営者がたどった道を歩むことになるんだろう。このシステムに何か大きな修正が施されない限りね。

エフィンガム氏

なんてこった！もしそうならば、国家としても、個人としても、我々には何の保障もなくなってしまっている、という訳さ。

パーク氏

今のところ、物資の保障は持たざる民に対してあるだけで、いくら金があったって、持てる者にはないのだよ。持てる者は利益が吸い取られてなくなるまでいくらでも税を支払わされる。そして自分が行っている事業を次から次へと手放すことを余儀なくされる。畑という畑は耕されなくなり、自身の蓄えは貸金基金に支払われてまともな収益には結びつかない。そして固定資本を残して全部が消えたところで、差し押さえられるのさ。破産だね。このような制度下では、資産の保全は、流砂に少しずつ飲み込まれる哀れな人の暮らしほどにしか、期待できないことになる。貧民たちはその間にも救貧法が許す限り、救済金をあてにできるのさ。(以下省略)(282-3)

このように8章では救貧法制度のもう一つの問題点、すなわち、この制度が勤勉な労働者たちがその税の支払いに窮することにもつながる点を訴えている箇所であるが、これに関しては『ジョン・ホプキンス』において、大変似通った状況をジョンとスタッフスが語り合う場面があることをここでは強調しておきたい。

スタッフス

もう一度言っておくが、救貧税が貧乏人を飢えさせることになっているんだ。それは、大家族で、低賃金、そして失業中の者たちのためのものだろう？それに、これは受給者が問題なだけではない。税を支払う必要がなければなんとか暮らしていた者たちまで、税を支払わされることで貧乏になってしまう。

ジョン

それは確かに正しいかもしれない。今朝わしが教区委員室で見た光景がそうだ。彼女を見るのは辛かったさ。コートに身を包んで、顔を隠すようにボンネットを目深にかぶっていた。だがわしにはわかったさ。ディクソンの未亡人だった。それでわしは彼女のほうを向いて、向こうもこちらを間近に見た途端、彼女は顔を赤くしていたよ。あの気の毒なディクソンが死んでからというもの、彼女の顔はシーツみたいに青白くなってしまって、目だけが大きくて。わしは彼女にどうしてそんなに費えが途絶えてしまったんだと聞いたのさ、何しろディクソンは奥方に相当額を遺していたはずだからな。彼女が言うには、「いいえ、ホプキンズさん。夫は生前、私が落ちぶれないようにありとあらゆることをしてくれていました。でもあの人の収入は少なかったですし、私たちの小さな店の収益は二人が食べていくのにやっとのものでした。毎年、僅かばかりは貯めておくべきだったのかもしれないですが、それも救貧税がなかったらできたでしょうけれど。貯金は救貧税にすべて持っていかれました。けれども今、私はそのことをとやかく言うべきではないのです。なぜってそのおかげで救済金をもらっているのですもの。でもこの恥辱と悲しみを一度に味わうのはとても辛いですわ。」そうして涙が彼女の頬をつたっていったんだ。

(中略)

スタッフス

しかしもしこの救貧税がここ数年そうだったようにこれからますます値上げしていったら、これが我々の行き着く先であるわけだよ。そのときこの税金を払うのは誰になるのだろうか？(108-9)

上記の引用箇所では、両テキストともに、屋外で偶然出会ったところで、共通の知人が救貧税の支払いに窮して費えがなくなってしまう悲劇を噂話で対話するという設定が酷似している。『ジョン・ホプキンズ』のもとになる小話が1831年に既に発表されていることを考慮するならば、マルティノーは自身の創作活動に際して、マーセットの『経済学対話』

だけでなく『ジョン・ホブキンズ』(の小話版)にも影響を受けた可能性は否定できないだろう。

『従姉マーシャル』の3章と8章は、物語全体の中では登場人物である二人がただ救貧法の矛盾点について対話を繰り返すことで成り立っているという意味でかなり特異で際立った章といえる。そしてこのことは何を意味するのだろうか。前述したように、マルティノーは、マーセットの『経済学対話』を初めて読んだ際に、そこで説明されている経済学の原理について、実際にそれらを具現化する人物集団のドラマとして描き出すことをオリジナリティとして打ち出そうと考えた。そして実際、『経済学実例集』において『経済学対話』よりはるかに緻密な場面設定を、扱う社会問題を引き起こす状況に応じて作り出し、「小説」としても通用するような読み物風教本を生み出した。しかし、社会における様々な現状や問題点を事例として写實的に小説仕立てで説明することと、その下敷きとして経済学の諸学説を読者に浸透させること、この二者の間には埋めがたい溝があった。巻末に要約をつけ、物語全体をもう一度、経済学の視座から語りなおしたのはそのためであったというのは容易に推測することができる。しかしそれよりもさらに不可視的にこの溝を埋めるための方策として、実は、小説内の登場人物によって自分たちが置かれた社会の矛盾を議論させる対話形式の有効性に、マルティノーは先達のマーセットの著作にふれることで気づいていったのではないだろうか。

### Ⅲ. 教本 vs. 小説

マーセットの『経済学対話』は公的教育へのアクセスを阻まれていた当時の中上流階級の10代の女子を対象に、また『ジョン・ホブキンズ』は同じく、「経済学」を学ぶ機会のない労働者階級の人々を対象にそれぞれ書かれた作品であった。どちらも架空の登場人物に、それぞれの想定した読者と同じ社会的身分にある者を配置し、その人物たちの目を通してみた社会の仕組みと経済についての見解がそのまま彼らの口から述べられる一方で、時として登場人物の視点から見えない大きな経済のメカニズムについて、いわば入れ知恵の形で登場人物が師とおおぐ人物から知識を得る形で物語は進み、教本の外側にいる読者たちは物語を読み進むことで自然に経済学を習得できる体裁をとっていた。読者(あるいは受講者)は小説の中に自分と同じ目的を持っているもう一人の作中読者(あるいは受講者)を見出し、その人物に自己を投影させ、「読む」もしくは「学ぶ」ということに対して絶えず自意識を持ちながら作品と向き合うことを余儀なくされる。物語の内側に自分が

存在していることを外側にいるはずの読者が自覚を余儀なくされる状況を作り出すテキストは、文学ジャンルの専門用語ではメタ・フィクションと呼ばれているが、仮に『経済学対話』が教本ではなくフィクションだとするならば、B夫人とキャロラインが繰り広げる物語は教義を学ぶ人について書かれたメタ・フィクション的要素をもつ小説と位置づけられるかもしれない。そしてこのメタ・フィクションの要素は、B夫人とキャロラインの講義形式に終始する『経済学対話』で色濃く、貧農ジョンの家族の生活を紹介した『ジョン・ホプキンス』ではやや緩和され、かわりに「フィクション」の度合いを強めることで、「読む」もしくは「学ぶ」ことに対する自意識をさほど持たない（であろうと著者が推測した）労働者階級への経済学大衆化をはかっていったのだ<sup>20</sup>。

マーセットに影響を受けたマルティノーは、しかしながらその『経済学実例集』において、このメタ・フィクションの度合いを『ホプキンス』よりさらに弱め、それはほぼ「フィクション」と呼んで差し支えないほどの物語設定に近づけていった。このことは、マーセットが経済学を学ぼうとする読者の向学心を最初から想定した上で作品を執筆したのに対し、マルティノーは読者がそこまでの向学心を持たずとも、読後に経済学の原理と世の中の仕組みを理解できるように、幅広い読者層に訴えかける作品を心がけたことを表している。そして実際、その後発表した作品群をみれば二人が異なる目的と意義をそれぞれの執筆活動に見出していたことが明らかである。マーセットは、B夫人とキャロライン（および姉のエミリー）による、中上流階級の10代の若者、そして特に女性たちをターゲットにした対話シリーズで、経済学以外では化学、植物学、物理学といった「科学」分野における教本を執筆した。マーセットにとって経済学はあくまでも「自然科学」の学問であり、勉学の対象であった。対するマルティノーは、『経済学実例集』に続いて、さらなる経済学関連のシリーズ読み物をいくつか発表したものの、その目的は経済学を普及させることよりもむしろ社会の諸問題を摘発し、問題点を大衆にも気づかせるためであった。経済学はそのための道具に使われたといっても過言ではない<sup>20</sup>。そしてその後、彼女は *Deerbrook* や *The Playfellow* といったフィクションも手がけ、教本執筆者というよりはむしろ小説家に限りなく近い立場にたっていたのである。

<sup>20</sup> この点に関しては、Yoshino (2008) において論じている。

<sup>21</sup> この点に関して、例えば Freedgood は、マルティノーは経済学を彼女の作品の中では社会の諸問題を解決する「神話」として利用し、読者に迅速な読後の安息を与える効果を発揮したとした上で、彼女は「自身の語りの方でもって大衆の〔社会不安に対する〕パニックを払拭するだけでなく、大衆の意見を形成することのできる作家であった」と評価している (37)。

マーセットの死に際して、マルティノーは『デイリーニュース誌』に回想録を寄稿したが、その中で彼女はマーセットが「イギリスの中流階級の知的向上に腐心した」ことを高く評価した<sup>22</sup>。ただし、マーセットが晩年に手がけた子供向けの教本に関しては「冗長多弁」であり、同様に、労働者階級向けの『ジョン・ホプキンズ』も「初期の作品に比べるとさほど成功しなかった」と批判もしている<sup>23</sup>。そしてこのマルティノーの見解は、『ジョン・ホプキンズ』を『経済学実例集』収録の各ストーリーを物語形式の教本という同ジャンルで比較してみれば、概ね公正であるといえるだろう。構成、人物描写、プロットなど、あらゆる面において『経済学実例集』は『ジョン・ホプキンズ』を超越した内容となっている。ただし、自らもマーセットの『経済学対話』に触発されたことがきっかけで、後続の経済学普及者となりえたことを一番自覚していたのもまたマルティノー自身であった。回想録の中でマルティノーはマーセットを「私たちの女性指導者」(our instructress)と幾度も呼び、「快活で、感銘を受けやすく、慣習の影響下にあって気取らず、自信に満ちた様相のかけで本質的に謙虚であった」<sup>24</sup>と、その地味で真摯な学問好きの先達を称えたのであった。

#### 参 考 文 献

- [1] Blaug, Mark. *Ricardian Economics: a Historical Study*. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1958.
- [2] Cooper, Brian P. *Family Fictions and Family Facts: Harriet Martineau, Adolphe Quetelet, and the Population Question in England, 1798-1859*. New York: Routledge, 2007.
- [3] Freedgood, Elaine. “Banishing Panic: Harriet Martineau and the Popularization of Political Economy.” *Victorian Studies*, 39 : 34-53. 1995.
- [4] Henderson, Willie. *Economics as Literature*. London: Routledge, 1995.
- [5] Hoecker-Drysdale, Susan. *Harriet Martineau: First Woman Sociologist*. Oxford: Berg Publishers, 1992.
- [6] Huzel, James P. *The Popularization of Malthus in Early Nineteenth-Century England: Martineau, Cobbett and the Pauper Press*. Burlington: Ashgate, 2006.
- [7] Marcet, Jane Haldimand. *Conversations on Political Economy in Which the Elements of That Science are Familiarly Explained*. London, 1816.
- [8] ——. *John Hopkins's Notions of Political Economy*. London, 1833.
- [9] Martineau, Harriet. *Harriet Martineau's Autobiography*. Ed. Maria Weston Chapman. Boston: J. R. Osgood and Company, 1877.

---

<sup>22</sup> Martineau (1869), 70. なお、引用はマルティノーが『デイリーニュース誌』に寄稿したその他の記事すべてを収録した *Biographical Sketches* からのものである。

<sup>23</sup> Ibid., 73-74.

<sup>24</sup> Ibid., 74.

- [10] ——. *Biographical Sketches*. New York: Leypoldt & Holt, 1869.
- [11] ——. *Illustrations of Political Economy*. 1832-34. Ed. Deborah Anna Logan. New York: Broadview Editions, 2004.
- [12] Polkinghorn, Bette and Dorothy Lampen Thompson. *Adam Smith's Daughters: Eight Prominent Women Economists from the Eighteenth Century to the Present*. Northampton: Edward Elgar Publishing, Inc., 1998.
- [13] Shackleton, J. R. "Jane Marcet and Harriet Martineau: Pioneers of Economics Education." *History of Education*, Vol. 19, No. 4, pp. 283-297. 1990.
- [14] Thomas, Gillian. *Harriet Martineau*. Boston: Twayne Publishers, 1985.
- [15] Wheatley, Vera. *The Life and Work of Harriet Martineau*. London: Secker & Warburg, 1957.
- [16] Yoshino, Narumi. "Gender, Sentiment and Science : the Rhetoric of Jane Marcet's *Conversations on Political Economy*." *Ikoma Journal of Economics*, Vol. 4, No. 3, pp. 121-138, 2007. (In Japanese)
- [17] ——. "Jane Marcet's *John Hopkins's Notions of Political Economy* (1833) : Its Narrativity and Ideology." *Ikoma Journal of Economics*, Vol. 5, No. 3, pp. 137-156, 2008. (In Japanese)